

〈造本装幀コンクール〉50回史年表

【「造本装幀コンクール」の50回-その変遷と役割】 付属資料 2017. 8. 23 作成：田中光則

年度	主な事項
1966（昭和41）年	<p>「出版・印刷・製本産業の向上発展を目的」に印刷時報社主催（協力・博報堂）による第1回造本装幀コンクール展が開かれる。</p> <p>1965年9月～1966年8月に刊行された書籍44社93点が出品され、10月の中央公論ビルにおける審査会でベスト10点、佳作15点が選ばれる。審査員は原弘（日宣美会員）、田中一光（日宣美会員）、今泉武治（東京ADC会員）、小池光三（武蔵野美術大学）ほか計7名。月刊「印刷時報」10月号（269号）に応募作品全点が写真で紙上展示される（作品評・データ付）。</p>
1967（昭和42）年	<p>印刷時報社主催（協力・博報堂）による第2回造本装幀コンクール展が開かれる。</p> <p>1966年9月～67年8月に刊行された書籍60社173点が出品され、10月の中央公論ビルにおける審査会で30点が入選した。審査員は田中一光（日宣美会員）、杉浦康平（日宣美）、柄折久美子（装幀作家）、小池光三（武蔵野美術大学）ほか計8名。月刊「印刷時報」10月号（281号）に応募作品全点が写真で紙上展示される（作品評・データ付）。</p>
1968（昭和43）年	<p>東京都立日比谷図書館・日本印刷工業会主催、全国製本組合連合会後援、印刷時報社協賛による第3回造本装幀コンクール展が開かれる。</p> <p>1967年9月～1968年8月に刊行された書籍117社433点が出品され、10月の日本印刷会館における審査会で最高特別賞1点、金賞1点、銀賞2点、銅賞6点、奨励賞43点が選ばれた。審査員は原弘（日宣美会員）、田中一光（日宣美会員）、小田切進（日本近代文学館）、小池光三（武蔵野美術大学）ほか計9名。東京・日比谷図書館で展示、月刊「印刷時報」10月号（293号）にも応募作品全点が写真で紙上展示される（作品評・データ付）。</p>
1969（昭和44）年	<p>日本書籍出版協会・全国製本組合連合会・日本印刷工業会主催、文部省・通商産業省・東京都教育委員会後援、印刷時報社協賛による（第4回）「1969年造本装幀コンクール展」が開かれる。</p> <p>・主催者・後援者や賞の設定は大きく変わったが、これまでの本展の趣旨を継承し、「より美しく、よりよい本づくり」という造本への関心を高め、書籍装幀による出版文化の向上をめざす。毎年、読書週間の催しの一つとして応募作品の書籍の展示を行ない、この展示会によって「装幀が担う役割りを認識」してもらおうと共に装幀に「新風を送り込んでいきたい」としている。</p> <p>・1968年9月～1969年8月に刊行された書籍97社321点が出品（豪華本/事典・全集類/美術書/専門書/児童書/文芸書/一般教養書/軽装本/その他の9部門）され、10月の日本印刷会館における審査会で文部大臣賞1点、通商産業大臣賞1点、東京都教育委員会賞1点、金賞10点、銀賞20点、銅賞30点の計63点が入選、10月31日～11月5日に第1会場・東急百貨店東横店、10月31日～11月3日に第2会場・北の丸公園科学技術館で展示される。審査員は原弘（日宣美会員）、田中一光（日宣美会員）、柄折久美子（装幀作家）、小田切進（日本近代文学館）、小池光三（武蔵野美術大学）、彌吉光長・三枝小枝子（読者代表）、主催・後援団体代表者ほか計13名。（以上、第1回から4回までの審査員の肩書は発表時のもの）</p>
1970（昭和45）年	<p>第5回造本装幀コンクール展が開かれる。110社334点が出品され、10月の日本出版会館における審査会で62点が入選、翌年1月29日～2月3日に東急百貨店・日本橋店で展示される。</p> <p>・募集部門は「外国語版」が加わり、10部門となる。</p> <p>・本展の入賞作品は70年（第4回入選作品）以降、東ドイツのライプツィヒで開催される「世界で最も美しい本コンクール」に日本を代表して出品されることになる。</p>
1971（昭和46）年	<p>第6回造本装幀コンクール展が開かれる。115社376点が出品され、10月の日本出版会館における審査会で22点が入選、翌72年1月28日～2月2日に東急百貨店・日本橋店で展示される。</p> <p>・東京ビニール加工紙協同組合賞が東京都光沢加工紙協同組合賞になる。</p> <p>・募集部門の「その他」が、「実用書（その他）」となる。</p> <p>・日本書籍出版会会長賞（10部門各1点）、日本印刷工業会会長賞（3点）、全日本製本工業組合連合会会長賞（3点）、日本写真製版工業組合連合会賞、東京ビニール加工紙協同組合賞、読書推進運動協議会賞、ユネスコ東京出版センター賞（以上各1点）が新設される。</p>

1972 (昭和47) 年	<p>第7回造本装幀コンクール展が開かれる。95社295点が出品され、10月の日本出版会館における審査会で28点が入選、翌73年1月19日～24日に東急百貨店日本橋店で展示される。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・日本図書館協会が後援団体となり、日本図書館協会賞が新設される。 ・ユネスコ・東京出版センター賞をユネスコ・アジア文化センター賞に改称。
1973 (昭和48) 年	<p>第8回造本装幀コンクール展が開かれる。94社297点が出品され、10月の日本出版会館における審査会で28点が入選、11月1日～9日に日本出版会館、翌年1月18日～23日に東急百貨店日本橋店で展示される。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・第5回で<銅賞>を受賞した『アポロ百科事典』(全3巻)(出版者-平凡社、編者-平凡社、装幀-原弘、印刷-東京印書館、製本-和田製本工業)が<世界で最も美しい本コンクール>で【金の活字賞】を受賞。
1974 (昭和49) 年	<p>第9回造本装幀コンクール展が開かれる。104社278点が出品され、10月の日本出版会館における審査会で28点が入選、翌年1月20日～25日に日本橋・丸善で展示される。</p>
1975 (昭和50) 年	<p>第10回造本装幀コンクール展が開かれる。138社408点が出品され、10月の日本出版会館における審査会で28点が入選、東京展が同年11月10日～14日に日本橋・丸善本店、名古屋展が11月24日～29日に丸善名古屋支店で開催される。</p>
1976 (昭和51) 年	<p>第11回造本装幀コンクール展が開かれる。99社330点が出品され、10月の日本出版会館における審査会で28点が入選、東京展が10月25日～30日に日本橋・丸善本店、大阪展が11月15日～20日に東区博労町・丸善で開催される(協賛・丸善)。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・東京ビニール加工紙協同組合賞が東京都光沢加工紙協同組合賞になる。
1977 (昭和52) 年	<p>第12回造本装幀コンクール展が開かれる。115社341点が出品され、10月の日本出版会館における審査会で28点が入選、東京展が11月21日～26日に日本橋・丸善本店、大阪展が翌78年1月7日～26日に東区博労町・丸善で開催される(協賛・丸善)。</p>
1978 (昭和53) 年	<p>第13回造本装幀コンクール展が開かれる。85社290点が出品され、10月の日本出版会館における審査会で28点が入選、東京展が11月13日～17日に日本橋・丸善本店、大阪展が翌79年1月16日～20日に東区博労町・丸善で開催される(協賛・丸善)。</p>
1979 (昭和54) 年	<p>第14回造本装幀コンクール展が開かれる。97社361点が出品され、10月の日本出版会館における審査会で28点が入選、東京展が11月19日～22日に日本橋・丸善本店、大阪展が翌80年1月28日～2月2日に東区博労町・丸善で開催される(協賛・丸善)。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・東京都光沢化工紙協同組合賞が全日本ビニール加工紙協同組合連合会会長賞になる。
1980 (昭和55) 年	<p>第15回造本装幀コンクール展が開かれる。134社368点が出品され、10月の日本出版会館における審査会で28点が入選、東京展が11月17日～19日に日本出版クラブ会館、大阪展が翌81年1月20日～23日に大阪市立図書館で開催される。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・全日本ビニール加工紙協同組合連合会会長賞が全日本光沢加工紙協同組合連合会賞に改称。
1981 (昭和56) 年	<p>第16回造本装幀コンクール展が開かれる。116社404点が出品され、10月の日本出版会館における審査会で33点が入選、11月11日～20日に神田・三省堂書店で展示される。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・審査委員会奨励賞(10点以内)を新設。 ・全日本ビニール加工紙協同組合連合会会長賞が全日本光沢化工紙協同組合連合会賞に改称。
1982 (昭和57) 年	<p>第17回造本装幀コンクール展が開かれる。134社426点が出品され、10月の日本出版会館における審査会で33点が入選、翌83年1月21日～27日に神田・三省堂書店で展示される。</p>
1983 (昭和58) 年	<p>第18回造本装幀コンクール展が開かれる。116社351点が出品され、11月の日本出版会館における審査会で33点が入選、翌84年2月1日～10日に神田・三省堂書店で展示される。</p>
1984 (昭和59) 年	<p>第19回造本装幀コンクール展が開かれる。147社486点が出品され、11月の日本出版会館における審査会で33点が入選、翌85年2月1日～10日に神田・三省堂書店で展示される。</p>

1985 (昭和60) 年	<p>第20回造本装幀コンクール展が開かれる。137社449点が出品され、10月の日本出版会館における審査会で39点が入選、10月21日～31日に神田・三省堂書店で展示される。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・印刷業界の組織再編に伴い、主催団体の日本印刷工業会は日本印刷産業連合会に変更。 ・出版文化国際交流会が後援団体となり、出版文化国際交流会賞が新設される。
	<ul style="list-style-type: none"> ・全日本光沢化工紙協同組合連合会賞が今回をもって終了となる。
1986 (昭和61) 年	<p>第21回造本装幀コンクール展が開かれる。147社446点が出品され、10月の日本出版会館における審査会で39点が入選、10月21日～31日に神田・三省堂書店で展示される。</p>
1987 (昭和62) 年	<p>第22回造本装幀コンクール展が開かれる。124社334点が出品され、10月の日本出版会館における審査会で39点が入選、翌88年2月1日～10日に神田・三省堂書店で展示される。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・印刷業界の組織再編に伴い、主催団体の全日本製本組合連合会は日本印刷産業連合会に一本化。
1988 (昭和63) 年	<p>第23回造本装幀コンクール展が開かれる。134社343点が出品され、10月の日本出版会館における審査会で33点が入選、11月1日～10日に神田・三省堂書店で展示される。</p>
1989 (平成1) 年	<p>第24回造本装幀コンクール展が開かれる。115社428点が出品され、10月の日本出版会館における審査会で39点が入選、11月1日～10日に神田・三省堂書店で展示される。</p>
1990 (平成2) 年	<p>第25回造本装幀コンクール展が開かれる。114社428点が出品され、10月の日本出版会館における審査会で41点が入選、11月1日～7日に神田・三省堂書店で展示される。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・10部門の募集分類を「豪華本」を廃止するなどして再編し、「文庫・新書・双書」、「社史・年史・自分史（私家版）」の2部門を加えて日本書籍出版協会理事長賞を12部門・12点に拡大、併せて日本印刷産業連合会会長賞も10点を12点に増やす。 ・第24回で<日本印刷産業連合会会長賞>を受賞した『年鑑 日本のグラフィック1989』（出版者-講談社、編者-グラフィックデザイナー協会、装幀-亀倉雄策、印刷-大日本印刷、製本-黒岩大光堂）が<世界で最も美しい本コンクール>で【金の活字賞】を受賞。
1991 (平成3) 年	<p>第26回造本装幀コンクール展が開かれる。115社373点が出品され、10月の日本出版会館における審査会で41点が入選、11月1日～10日に神田・三省堂書店で展示される。</p>
1992 (平成4) 年	<p>第27回造本装幀コンクール展が開かれる。116社425点が出品され、10月の日本出版会館における審査会で41点が入選、10月31日～11月4日に東京池袋サンシャインシティ文化会館（'92東京国際ブックフェア）で展示される。</p>
1993 (平成5) 年	<p>第28回造本装幀コンクール展が開かれる。135社539点が出品され、11月の日本出版会館における審査会で41点が入選、翌94年1月27日～30日に日本コンベンションセンター（千葉・幕張メッセ）で開催の東京国際ブックフェア'94で展示される。本展は今回（第28回）から東京国際ブックフェア（以降、TIBFと略す）の併催行事となり、以降の展示はTIBF会場で行なわれることとなる。</p>
1994 (平成6) 年	<p>第29回造本装幀コンクール展が開かれる。115社526点が出品され、11月の日本出版会館における審査会で41点が入選、翌95年2月8日～11日にTIBF（日本コンベンションセンター・幕張メッセ）で展示される。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・株式会社印刷出版研究所が協賛し、事務局を担当。
1995 (平成7) 年	<p>第30回造本装幀コンクール展が開かれる。99社496点が出品され、11月の日本出版会館における審査会で41点が入選、翌96年2月8日～11日にTIBF（日本コンベンションセンター・幕張メッセ）で展示される。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・東京都教育委員会賞が東京都知事賞に変更。

1996（平成8）年	第31回造本装幀コンクール展が開かれる。107社521点が出品され、11月の日本出版会館における審査会で41点が入選、翌97年1月23日～26日にTIBF（東京ビッグサイト・有明）で展示される。
1997（平成9）年	第32回造本装幀コンクール展が開かれる。102社449点が出品され、11月の日本出版会館における審査会で41点が入選、翌98年1月22日～25日にTIBF（東京ビッグサイト・有明）で展示される。
1998（平成10）年	東京国際ブックフェア（TIBF）の開催時期が変更になったため、第33回以降の募集作品は前年の1年間（1月～12月）に刊行された書籍が対象となり、審査会および展示会はその翌年に行うことになる。
1999（平成11）年	第33回造本装幀コンクール展が開かれる。101社432点が出品され、2月の日本出版会館における審査会で41点が入選、4月20日～23日にTIBF（東京ビッグサイト・有明）で展示される。
2000（平成12）年	第34回造本装幀コンクール展が開かれる。101社421点が出品され、2月の日本出版会館における審査会で41点が入選、4月22日～25日にTIBF（東京ビッグサイト・有明）で展示される。
2001（平成13）年	第35回造本装幀コンクール展が開かれる。118社456点が出品され、2月の日本出版会館における審査会で38点が入選、4月19日～22日にTIBF（東京ビッグサイト・有明）で展示される。 ・『蒸気機関車の道—ある20世紀文明の終焉』文殊四郎義博（装幀・文殊デザインスタジオ）に「審査委員会特別賞」が授与される。
2002（平成14）年	第36回造本装幀コンクール展が開かれる。96社445（447）点が出品され、2月の日本出版会館における審査会で41点が入選、4月18日～21日にTIBF（東京ビッグサイト・有明）で展示される。
2003（平成15）年	第37回造本装幀コンクール展が開かれる。109社404点が出品され、2月の日本出版会館における審査会で38点が入選、4月24日～27日にTIBF（東京ビッグサイト・有明）で展示される。 ・「より質の高い開かれたコンクール」をめざし、審査方法等の抜本的な見直しが行われる。①装幀家・デザイナー、学識経験者、読者代表、主催団体代表による三賞選考委員会を設置する、②審査員を一新する、③三賞の授賞装幀者にも主催者から賞状と賞牌を授与する、などを実施。 ・「審査委員会奨励賞」（「三賞に準ずるもので、特に社会変化、読者ニーズに対応した優れた企画力のある作品」と規定）を廃止し、「技術や表現に新しい試みや工夫が施され今後の展開が期待されるなど、審査員が特に推奨する作品。若手装幀家を育成することを目標とする」「審査員奨励賞」（10点以内）を新設。 ・日本書籍出版協会は、審査会・実行委員会担当として従来の＜生産委員会＞に、造本装幀が読書推進に果たす役割を重視して＜読書推進委員会＞を加える。
2004（平成16）年	第38回造本装幀コンクール展が開かれる。124社457点が出品され、2月の日本出版会館における審査会で34点が入選、4月22日～25日にTIBF（東京ビッグサイト・有明）で展示される。 ・引き続き審査会の見直しがすすめられ、①三賞選考委員会に印刷・製本の専門家アドバイザーを加える、②下見時間を増やす、③装幀家からの応募を勧めるため、日本図書設計家協会の協力を得て全会員にメールで「募集要項」を送付する、などを実施。 ・『日本の近代活字 元木昌造とその周辺』（発行者：NPO法人近代印刷活字文化保存会・装幀：勝井三雄・印刷・製本：インテックス）に「審査委員会特別賞」を授与。同書は、翌2005年の＜世界で最も美しい本コンクール＞で【金の活字賞】を受賞。
2005（平成17）年	第39回造本装幀コンクール展が開かれる。135社485点が出品され、4月の日本出版会館における審査会で33点が入選、7月7日～10日にTIBF（東京ビッグサイト・有明）で展示される。 ・開かれたコンクール、社会的認知のひろがりをめざし、これまで日本出版会館で行われてきた授賞式を東京国際ブックフェア会場のオープンスペースで行ない、式後、柏木博審査員が記念講演「装幀を愉しむ」を行なう。

	<ul style="list-style-type: none"> ・三賞以外の授賞装幀者に対しても主催者から賞状・賞牌を授与。
2006（平成18）年	<p>第40回造本装幀コンクール展が開かれる。115社439点が出品され、4月の日本出版会館における審査会で34点が入選、7月6日～9日にTIBF（東京ビッグサイト・有明）で展示される。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・日本印刷産業連合会会長賞のうち、印刷・製本技術に特に優れた作品を評価する「印刷・製本特別賞」が新設される。 ・第40回を記念し、授賞式で勝井三雄が「ブックデザインと私」と題する講演を行なう。 ・10月、印刷博物館のP&Pギャラリーで第40回記念展「日本とドイツの美しい本2005」が開催され、両国の入選作品が展示される。関連催事として「美しい本とはーコンクールを通じて見えてくるものー」と題してウタ・シュナイダー（ドイツ・エディトリアルデザイン財団事務局長）と児玉清（第40回造本装幀コンクール審査委員長）の対談が行われる。同展は2007年も開催されたが、2008年からは「世界のブックデザイン」展へと発展し、「世界で最も美しい本コンクール」やスイス、オランダ、フランスなどのコンクールで入賞した作品などを紹介、今日に至っている。
2007（平成19）年	<p>第41回造本装幀コンクール展が開かれる。107社363点が出品され、4月の日本出版会館における審査会で36点が入選7月5日～8日にTIBF（東京ビッグサイト・有明）で展示される。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「審査の精度」「信頼と認知」を高めるために、①主催団体（2代表）が三賞選考委員会から外れ、新たに学識経験者枠を1名増やす ②従来は三賞審査終了後にその他各賞を決定する方式であったが、責任の所在を明確にするため各賞審査を先行させ、三賞は各賞の入選作品決定後に三賞選考委員会を開き決定（重複授賞可）する方式とする。
2008（平成20）年	<p>第42回造本装幀コンクールが開かれる。127社378点が出品され、4月の日本出版会館における審査会で36点が入選、7月10日～13日にTIBF（東京ビッグサイト・有明）で展示される。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「造本装幀コンクール展」を「造本装幀コンクール」に名称変更。
2009（平成21）年	<p>第43回造本装幀コンクールが開かれる。123社344点が出品され、5月の日本出版会館における審査会で31点が入選、7月9日～12日にTIBF（東京ビッグサイト・有明）で展示される。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・審査員奨励賞10点以内を5点以内とする。
2010（平成22）年	<p>第44回造本装幀コンクールが開かれる。156社384点が出品され、4月の日本出版会館における審査会で34点が入選、7月8日～11日にTIBF（東京ビッグサイト・有明）で展示される。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・＜2010年国民読書年＞にちなんで、「国民読書年特別賞」を設ける。 ・出版文化産業振興財団（JPIC）が後援・協賛団体となり、出版文化産業振興財団賞を新設。また、今回から事務局を担当する。
2011（平成23）年	<p>第45回造本装幀コンクールが開かれる。113社309点が出品され、4月の日本出版会館における審査会で23点が入選、7月7日～10日にTIBF（東京ビッグサイト・有明）で展示される。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・日本書籍出版協会理事長賞12部門の募集部門が再編され、6部門（文学・文芸（エッセイ）/芸術書/絵本・児童書/専門書（人文社会科学・自然科学）/語学・学参・辞事典・全集・社史・年史・自分史/生活実用書・文庫・新書・双書・コミック・その他）となる。これに伴い、日本出版書籍協会理事長賞および日本印刷産業連合会会長賞各12点も各6点となる。また、審査員奨励賞（5点以内）を3点以内とする。 ・ユネスコ・アジア文化センター賞が今回をもって終了となる。
2012（平成24）年	<p>第46回造本装幀コンクールが開かれる。136社315点が出品され、4月の日本出版会館における審査会で22点が入選、7月5日～8日にTIBF（東京ビッグサイト・有明）で展示される。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・長年審査員を務めた読者代表児玉清（第29回～45回、うち37回～44回まで委員長、45回は欠席）の死去に伴い、読者代表として中江有里が就任。

	<p>・印刷博物館が「世界のブックデザイン」展の催事として2012年から毎年、「造本装幀コンクール受賞者「受賞作」を語る」と題する三賞受賞装幀者等によるトークショーを開催。</p>
2013（平成25）年	<p>第47回造本装幀コンクールが開かれる。149者366点が出品され、4月の日本出版会館における審査会で22点が入選、7月3日～6日にTIBF（東京ビッグサイト・有明）で展示される。</p> <p>・国立国会図書館が平成25年度から原装のままの保存用複本の収集を開始。収集する複本の範囲は「出版文化史上、あるいは造本・装丁上意義があり、将来に示唆を与えると考えられる国内刊行図書」で、当面は本コンクールへの出品作品のみが保存対象。第47回（2013年）コンクール以降の応募作品は、審査会を経て東京国際ブックフェアで展示後に寄贈され、国立国会図書館の〈原装保存コレクション〉として外装（カバー・帯）を含めて保存されることとなる。</p>
2014（平成26）年	<p>第48回造本装幀コンクールが開かれる。126者334点が出品され、4月の日本出版会館における審査会で22点が入選、7月2日～5日にTIBF（東京ビッグサイト・有明）で展示される。</p>
2015（平成27）年	<p>第49回造本装幀コンクールが開かれる。148者349点が出品され、5月の日本出版会館における審査会で22点が入選、7月1日～4日にTIBF（東京ビッグサイト・有明）で展示される。</p> <p>・展示スペースが拡大され、ブース内で〈蛇腹折製本・16ページ付け〉ワークショップを開催。</p>
2016（平成28）年	<p>第50回造本装幀コンクールが開かれる。144者334点が出品され、5月の日本出版会館における審査会で22点が入選、9月23日～25日にTIBF（東京ビッグサイト・有明）で展示される。</p> <p>・第50回を記念して東京国際ブックフェアの会議場で、審査員の柏木博、ミルキィ・イソベ、緒方修一による「トークショー」を開催。</p> <p>・前回に引き続きブース内で〈和綴じ製本〉ワークショップが実施される。</p>

注

- 1) 本「年表」は、第1回（1966年）から3回までは月刊「印刷時報」269号、281号、281号を、第4回から50回までは主として各回「パンフレット」および関係資料、関係者の証言等をもとに作成した。
- 2) 「コンクール（展）」の開催年は、審査会と展示会が同年の場合と、展示会が審査会の翌年の場合がある。本表では審査会（授賞作品の決定）の開催年を「コンクール（展）」の開催年として記載した。
- 3) 横罫の太線は大きな転換点を示す。第3-4回は主催者の交代、26回-27回は展示会場の変更、第36回-37回は審査方法の改革。
- 4) 本文中の「3つの転換点、5つの要因（推進力）」に関わる主な事項を「ゴシック体」にした。
- 5) 第4回～7回、11～13回、20～22回、44回の応募社（者）数および第4～8回の応募出品点数は、パンフレットの本文等に記載がないので「入賞作品リスト」「部門別出品作品リスト」をもとに筆者が数えて記入した。
- 6) 第5～10回、14回の審査会場は、パンフレットの本文等に記載がないので筆者が推定・記入した。
- 7) 世界で最も美しい本コンクール：1963年に東ドイツのライブツィヒで書籍業組合の主催で始まり、東西ドイツ統一後の1991年からはドイツ・エディトリアルデザイン財団が主催する国際ブックデザインコンクール。金の活字賞1点、金賞1点、銀賞2点、銅賞5点、荣誉賞5点が選定される。
- 8) 三賞：文部科学大臣賞・経済産業大臣賞・東京都知事賞

|